

曾野綾子

神の汚れた手

下



神の汚れた手下

曾野綾子

朝日新聞社

神の汚れた手 下

昭和五十五年二月十日 第一刷発行
昭和五十五年三月三十一日 第五刷発行

定価 九二〇円

著者 曾野綾子

発行者 藤田雄三

発行所 朝日新聞社

東京・大阪・名古屋・北九州

印刷所 図書印刷

©Ayako Sono, 1980
0093 - 254730 - 0042

目次

万世一系	5
すべてを見た人	31
夕陽に向かう道	74
百日紅の記憶	113
殺意	149
暗い芽	175
鎮魂	203
夕の海に	231
「私は誰？」	251

装帧
桜井幸太郎

神の汚れた手
下

万世一系

梅雨が晴れたこともあって、あたりは何となく活気づいたが、理由は決してお天気ばかりではないことを貞春は感じていた。

或る日、貞春が手術室の前を通りかかると、その午後に予定されている帝王切開の用意をしていた看護婦たちの声が聞こえて来たが、その中の一人が、

「私、ちょっと行ってミコさんの顔みて来るね。一日見ないと、落ち着かないよ」と言っているのであった。

「早く行っておいでよ、大体、この人はトイレでも何でも休こらえ性がないんだから」

笑い声が聞こえる。貞春は、さっさとその前を通り抜けた。しかし、都がそれほど看護婦たちにかわいがられているということは、意外なようでもあり、半ば計算されたことだったような気もした。

こんな赤ん坊を預ることは、めったにないが、母親が二番目三番目の子をお産する時、やむなく上の子を連れて入院して来る例は今までもよくあったのである。お産の時ときには、誰か手伝いの人が来てくれるものなどと思うのは、甘い話であった。核家族でなくても、姑しゅうとめが高齢だったり、孫をみるのを嫌がったりして、上の子の面倒をみてくれる人がない、というケースは往々にしてあるので

る。

そういう場合、母親は陣痛の合間にも、上の子に喋りかけたりして時間を過ごす。分娩室に入っている間だけは、手の空いている看護婦がみてやる。翌日からは、もう母親は、自分が食べながら上の子にも食べさせるし、子供が倦きて廊下に出てくれば、やはり看護婦の誰かが相手になっている。

医学的に言えば、新生児の近くに、子供を近づけない方がいいというが、家に帰れば、その日から赤ん坊は黴菌に触れて暮らさなければならぬのだから、同じことだと、貞春は思っている。むしろ貞春は、こういうことが看護婦たちにとって、意外と大切なことだと考えていた。病人、患者、産婦と言った人たちも、生活を背負っている。その点をよくよく知らなければ、本当の看護はできっこない。

佐藤都が変わった子だということは、連れて来られた日から、はつきりしていた。

貞春は、自分の所で生まれた新生児同様、都の血液検査をすることにして、早速採血をしたのだが、メスで足の裏を切っても、都は顔をしかめただけで泣きもしなかった。お尻が汚れる。喉が乾く。お腹が空いた。暑い。あらゆることで、子供は声をあげて泣くものだが、都は一声だって泣かない、と言うのだった。

「先生、おかしいですね。この子^{つんぼ}、かしら」

看護婦たちは、代る代る都を抱きながら言った。

「^{おれ}でも^{おれ}でも、赤ん坊は泣くんだよ」

「あら、それもそうね」

「エコヒイキするなよ。都ばかり抱いてるぞ」

貞春は看護婦たちに冗談を言った。

「だって、ミコたんはかわいいんですもの」

「泣かないからか？ 手数をかけないからか？ 現金なもんだ」

「違いますう！」

乳児院を開業したわけじゃないから、と貞春は時々、都のことを考えた。そう思う後から、冷たい気持ちにならないこともなかった。よその婆さんの孫が生んだ赤ん坊の行き先まで考えてやることはない。山陰の、赤ん坊の実家では、扱いが悪くても何でも、月十万で預ってくれる家があったものを、ヒイばあさんがしゃしゃり出て、勝手に連れて行った、と怒っているであろう。老いの身も考えずに、無鉄砲に出しゃばるなら、血圧が上がったって何したって、そちらの責任だ、と思っているかも知れない。

「先生、ミコたんのお尻、きれいになったでしょ。見て下さい」

貞春は、得意気な若い看護婦たちに見せつけられた。風呂に入れ、後の手入れがいいので、ただれていたお尻はみるみる健康な皮膚に戻って来た。しかしそれでもなお、都は声を出しては泣かなかった。小児科の専門ではないからわからないが、泣かない子、というのは見たことがないように思う。ということとは先天性の聾啞でも泣くのであろう。しかし、現実には都は、赤ん坊らしい泣き声を出さない。かりに一年を過ぎていけば、泣かない理由に子供なりの心理的なものが入る可能性も考えられた。たとえば、泣く度に煩いと云って殴打されると、ついには恐ろしくて泣かなくなる、というような反応である。しかし生後二カ月の幼児に、そのような心理的な計算があるわけはないのだ。それでも声を出さないということは憐れを誘うのであった。それに、都が本当に泣いていないのかどうかよくわからない。泣いているつもりでも、声が出ていないだけなのかも知れない。その証拠のように、幼児は時々一言も声をたてないまま、ぼろりと大粒の涙をこぼすのであった。

「かわいそうにねえ、ミコたん。あなたはどんなひどい目に会って来たの。泣くといじめられたの？ ここはいいんだよ。泣いてもいいの。泣いてごらん、大きな声で泣いてごらん」

看護婦たちはあやしている。

「そうだ、泣くより笑ってごらん。もう笑えるくらい大きくなってるでしょう、ミコたんは」
確かに、普通の子ならもう声を立てて笑ってもいい頃であった。

貞春は一度、小松老夫人の家へ電話をかけてみた。

「いかがですか、その後？」

「ありがとうございます。血圧の方はおかげさまで少し落ちついておりますが、先生にあの子を預かって頂いて気が緩んだせいか、風邪をひきまして」

本当に声が哽^{しやが}れていた。

「一度、見に上がらなければならないと思っておりますが」

「都ちゃんは元気ですよ。お尻もきれいになったし、看護婦たちもかわいがってますから。ただ、どっちみちお手放しになるなら、奥さんご自身もあまり会われん方がいいと思いますけど」

ちょうどその頃、貞春は或る日、坂部電氣^{さかべでんき}という出入りの電気屋の主人が、待合室のあたりをうろろしているのを見かけたことがあった。

「お早う、ごくろうさん。今日は何かうちで頼んだの？」

貞春は声をかけた。

「いや、そうじゃなくて、先生にちょっと相談にのってもらいたいことがあってね」

「いいよ、ちょっとくらいなら今、構わないよ。入りなさいよ」

「そうですか」

貞春は人^{ひと}気のない診察室に坂部を呼び入れた。

「どうしたんですか」

「実はね。いつかちょっと、浦和の方に嫁に行ってる妹の話、したでしよう」

「ああ、一人息子を死なせた人ね」

貞春は思い出した。

「まだ妹は三十五だしね、そのうちにまた生めるだろうと思って、自分は相手にもしなかったですよ。ところが、三年経ってもできないもんで、この頃、少しノイローゼみたいになってるんですよ。それで、貰い子をしたら後ができるって言うでしょう。だから、先生とこで、誰か赤ん坊をくれる人はいなかったね、もう大分前に相談かけて来たですよ。だけど、自分が思うには、赤ん坊は西瓜じゃないからね、そう簡単に貰ってももらえないし」

「下ができたら、上が邪魔になるじゃないか」

「そんなことは絶対ないって言うんです。もともと子供は二人以上はしなかったんだし、下の子ができたのも、上の子のお蔭だと思えば、下の子より大切にする、って言ってるんです」

貞春は黙っていた。

「しかし、今どき、子供、くれない、っていう人はいんでしょうね」

「そうさな。なくはないな。現に今一人、うちで預ってる」

「え？　ほんとですか。男の子ですか、女の子ですか」

「女の子」

「実は妹も、貰うなら女の方がいい、って言ってたんです。男だと、どうしても、死んだ息子のこと思い出しちゃうから、って言ってましてね」

本当は、決してそんな理由ではないのだ。養子に女の子が望まれるのは、貰う方が意識の一番奥の方で、その子を信じていないからなのである。つまりその子が大きくなって、万が一、暴力的にでもなったら、厄介者を背負いこむようなものだ。その点、女の子なら、殺人や強盗犯人にはなるまい。せいぜいで、盗みや売春ぐらいだ、と人々は計算するのである。

「妹に相談してやっていいですか」

「ああ、いいよ」

「すぐ返事しますから、自分が来るまで、ひとつ、他の人にはやらんでおいて下さい。先生、頼みます」

これで養子の話がうまくまとまったら、萬々歳だ、と貞春は思った。もちろん、運というか巡り合わせの力が最大のものだけれど、自分には、もしかすると、仲人の才能もあるのではないか。都については、もう少し体力がついたら、寛齋子に相談してみようと思っはいたが、齋子の口は所詮、外人にやることになる。貞春が多少こたわるのはその点であった。日本人には誰一人として、この子の引き受け手はないものなのか。

電気屋の坂部恵造が電話をかけて来たのは、その翌日であった。

「先生、妹に電話をかけてやったら、ひどく喜んでましたよ。すぐにも浦和から出て来そうなことを言うから、まあ、ちょっと待ってな、って言ってやっただけだね。妹の亭主も電話口に出て来て、血統の方は大丈夫か、と言うもんですからね」

「血統は僕ぐらい確かだよ。北京原人以来、万世一系だから、立派なものだ」

貞春は言った。

「先生、冗談は別にして、親はどういう人なんです？」

「坂部さん、悪いけど、それ訊くならあなたの妹さんには子供やるのやめたよ」

貞春は言った。

「へ？」

「あなたは一方的に子供を選ぶつもりでいるらしいけど、子供だって、養子の場合は親を選ぶ権利があるんだよ」

「いや先生、私は別に、何様の子を貰おうっていうんじゃないんです。只ね、一応、悪い病気がないか、親がどんな人か、というくらいは訊いておきたいと思ひましてね」

「いや、先生がそれじゃいかな、とおっしゃるようなら、妹にも、妹の亭主にもそう言ってやりま
す」

「私は養子を世話するんだったら、無条件でやりたいんだ。実の親なら、たとえ不具の子でも育てるんだから」

「わかりました。妹の亭主によく言ってやります」

看護婦たちは、貞春と坂部との会話に、それとなく耳を傾けていたようだった。

「先生、ミコたんを、もうすぐ養子にやるんですか？ いいところがあったら」

「すぐにはやらんさ。まだ瘦せてるもんな。もう少しうまそうに肉をつけてからだ」

「ミコたんがいなくなると淋しくなるわね」

岩波啓子が朋輩の倉田順子に言った。

「どこへもやりたくないわね」

「いつ迄もうちで、乳児院やるか？」

「そうしたいわね」

貞春はいつも甘い話には、少しも心を動かされなかったが、その日ばかりは若い看護婦たちの会話を一種の救いのように聞いていた。彼女たちの自然な反応がなければ、その日の貞春は、無限に暗い気分のにめり込みそうだからであった。だから翌朝、坂部恵造が、妹夫婦が心を入れ替えて無条件で都を養子にしたい、と言って来た時、貞春は改めて、彼を試すようなことを言った。

「坂部さん、それがどうもうまくないんだよ」

「どういふふうにです？」

「実は、第一に栄養状態が悪くてひどく瘦せている。だから今のままじゃ心配で渡せない。少なくとも二、三カ月は待つて貰わなきゃならない」

「へえ」

「それから、どういう訳か泣かないんだ。もしかすると啞かも知れない。そういうことを全部承知で貰ってくれるなら、喜んでお願いする」

「そうですか。いやあ、それは困っちゃったなあ。妹の方では、すごく喜んで、今日も僕からの電話待ちということになってるんですけどね」

「済まない。それでよければお願いする」

貞春は、自分の意地の悪さを感じていた。坂部に言ったことは、嘘ではないが、意図としては明らかに相手を試すためである。そして、相手の返事を待つようなポーズを取りながら、貞春は、既に坂部の返事の結果を予想しているのであった。

果たしてその午後、坂部は律儀に電話をかけて来た。

「妹に相談したんですが、やっぱりそんなに痩せてる赤ん坊を貰って、万が一、死なせでもしたら可哀相だから、今回は見送らして貰おうということになったんです」

「いや、それで結構。いろいろお手数をかけて済みませんでした」

貞春は受話器を置き、それから妙に心が涼しくなっているのを感じた。数年前、貞春は、香苗にねだられて、ペット屋で秋田犬の仔犬を買わされたことがあった。連れて帰って二、三日すると、仔犬は下痢をするようになった。妻は仔犬をタオルに包んで犬屋に見せに行った。すると犬屋は、少し様子を見るために預りたい、と言い、二、三日すると、あの犬はどうも思わしくないから、同じ秋田犬の、別の健康な犬を連れて行って貰えないか、と連絡して来た。

母から、その話を聞かされた時、香苗は、ちょっと考えていたが、「いやだ」と首を振った。あの犬にはもう「チビクロ」という名もつけた。あの犬はあの犬で、他の犬はチビクロではない。

貞春は何も言わずに聞いていたが、娘の反応をまともだと思い満足であった。

今、起こったことは、比べるのは悪いが、犬屋の反応とそっくりである。坂部の妹夫婦は体裁よく、万が一のことがあると可哀相だとは言ったが、それでは瘦せがなおったら下さい、とは言わなかった。病気の犬は換えてほしい、という客の心理と同じように、啞かも知れぬ子は、やはり貰いたくなかったのだ。

その夜、貞春は又もや真弓が留守ということもあって、一人で雑然とした読書をして、夜半過ぎまで起きていたのだが、その中に、いささかゴシップ的な興味をもって読める記事があった。

それはあの「姑」に連れられてやって来た門司という患者の身許がはつきりしたことであった。

貞春の所へは、医家向けの薬品を作っている会社のPR雑誌などがよく送られて来るが、普段はあまりいいねいに読みもしないのに、偶然その夜手にした青木製薬という会社で作っている「健康通信」という雑誌の写真頁に、どうも見たことのある顔が見つかったのである。

それは「ご夫妻探訪」という題で、比較的高齢の著名人の夫婦を訪ね、その健康法や趣味などを紹介する頁らしかった。そこにあの姑の方の門司夫人が、夫と二人で、トレーニング・スーツを着て海辺の道をジョギングしているところが写っていたのである。

門司源之助氏は六十四歳。中部造船という会社の副社長である。夫人の三枝子は五十六歳。関東ガス社長の小杉光男氏の妹だと書いてある。小杉光男と門司源之助は三高時代共にボートの選手仲間、小杉氏が妹を門司源之助に嫁がせた。門司氏の方の妹の妙子は、今は、駐チリ日本大使の六郷秀世の夫人だが、この六郷も、やはり三高のボート部の後輩であった。今この三人の義兄弟は陸に上がった河童だが、いずれもスポーツで体を鍛えつづけており、小杉は剣道、門司はマラソン、六郷は乗馬と、

それぞれ健康自慢だと書いてある。

「奥さんもご主人につき合ってマラソンは始終なさいますか？」との質問に、三枝子夫人は、「いいえ、速度も違いますし、家の仕事で充分駆け廻る日は、マラソンなどしなくても疲れ果てて寝たいだけです」と答えた、と結んであった。

へえ、そういうお家柄だったのか、と貞春は思った。経済人なら、門司という名前を聞いただけではたと思い当たるのだろうか、貞春には縁のない世界の話である。

そういう家の嫁だったら、なおさらいろいろなことが問題になるだろう。東京の病院へ行くと噂になるような気がして、わざとこんな田舎の医院を選んだのかも知れない、と貞春は思った。

その翌朝、貞春は外来で仕事を始めたところで、全く偶然に門司夫人からの電話を受けた。

「お仕事中、申しわけございません。いろいろご心配をおかけ致しましたが、やはりレントゲンのことも気になりますし、今回は一応見送ることに、早希子さんも納得してくれましたから」

「そうですか」

「それでそうになりましたら、一日でも早い方がよろしいと思いますが、何日くらい入院させて頂いたらよろしいものでございましょうか」

「まあ、五日から一週間と思つて頂きたいんですけど」

「お部屋の方はお空きでいらっしゃいますか？」

「いいですよ、いつでも結構です」

陽ざしは湘南に夏が来たことを告げていた。

貞春はその日初めて泳いでみようかと思った。七月初めのまだ海の水が冷たい時、八月に入つて波が荒い日や海が赤潮で汚れる時、そして次第に海にクラゲがふえて水温も低くなり出す九月のために、貞春は、小網代こあじろという小さな華やかな感じの湾に面して立っているリゾート・マンションのプールだ